龍の煌き

四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍の煌き

【Ｎコード】
Ｎ１６１３Ｚ

【作者名】
四季

【あらすじ】
「２０ＸＸ年――――――――世界は急激に変化していた。」
超能力者や異能力者、無能力者で分けられ差別される世界。
そんな世界の中で生きる少年―獅子裂零禍。
彼は一体、どのように生き、どのようにして戦っていくのか・・・・・・！

プロローグ

２０ＸＸ年――――――世界は急激に変化していた。

世界は三つの勢力に分割され、

ＥＵとロシア、アジアは解体され、ＥＵと西ロシア、西アジアの連合国家『ＮＥＵ』。

余った東ロシアと中国、アメリカによる連合国家『大アメリカ帝国』。

そして、それ以外の『中立国』である。

そして、人類にも変化が訪れた。

世界で超能力や異能力とよばれるものが見つかったのである。

世界は大幅に変わった。
無能力者と能力者は差別され、能力者ばかりが優遇されていた。

―ちなみに僕は無能力者である。
何のとりえもないような、ね。

「はあ・・・・・」

言い忘れていたね。僕の名前は獅子裂零禍。
私立学校に通っている中学2年だ。

僕が通っている【私立四神学園　（しりつししんがくえん）】は
龍乃碕市にある大規模な学校で、
中等部と高等部があり、全寮制だ。

校舎は主に、中央、西側、東側、南側、北側があり、
中央には大型の体育館（アリーナ）や職員室、それ以外のところが教室や、部室
であるという構成であり、なかなかに面白かったりする。

外には校庭と寮があり、その更に外側には大きな壁に覆われている。
何故かって？まあ、気にするな。

出口は正面と裏の二つだけで、基本的に玄関はすべての校舎（中央を除く）にあり、どこからでも入れる。

それでいて能力者でも無能力者でも通える特殊な学校なんだ。

私立の試験校だから学費とかも意外と安いしね。

季節は春。

気持ちのよい風が僕の体を包む。

「ふわぁ～」

ついつい欠伸が出てしまうのも仕方はない。

―本当に気持ちのいい朝だな。

そう思いながら、歩いていたとき、不意に誰かと激突してしまった。

思えば、これが一種の運命の分岐点（ターニングポイント）だったのかも知れない。

ドン！

「きゃ！」

「うぉっと！」

刹那。

僕は彼女が倒れないようにその手をつかんだ。

―よかった・・・・・。ビックリしてはいるけど怪我はないみたいだ・・・。

「ゴ、ゴメン！前見てなかったから」
「い、いえ！私も気づいていませんでしたし・・・」

ぶつかってしまった彼女に侘びを入れて、今度こそしっかりと立たせた。

「大丈夫だった？」
「え？うん」

―ヤバイ、早く行かないとクラス表見れないぞ。

「ゴメン！これから用事があるんだ！それじゃ！」

僕はそう言って走る。
目指すは学校の玄関である。

―この時間ならもう張ってあるだろう。

僕は急いで向かった。

この時、後から起こる不可思議な出来事を、僕はまだ知らなかった。

第一話

夢を・・・・見ていた。
とてもありえない夢。

僕が剣？銃？弓？槍？鎚？をもって戦っている夢。
僕が相対しているナニカ。
何故か僕には、僕がそのナニカと同じように見えてしまっていた。

そう、それではまるで――――――

◆

「・・・・ハッ！」

朝、５時。寮の部屋で僕は目が覚めた。
さっきまで見ていた夢の中身はおぼろげにしか覚えていない。
あまり気にすることではないだろう、そう思い顔を洗いに洗面所へ向かった。

ジャーーバシャッバシャッキュッ

鏡に写っているのは、少し眠たげだが、整った顔立ち（よくその所為で女に間違われる）に長いクセのないきれいな茶髪（その所為で女に（ｒｙ）に少し吊り上った瞳。
間違いなく僕の顔だ（というか違ったら怖いわ）。

「ふわぁ・・・・・」

うーむ。まだ眠いな。
でも、今から寝ると確実に遅刻するし・・・・・。

「とりあえず、着替えよ・・・」

僕は部屋の壁に掛けてあるシャツと制服に手を伸ばした。
上を脱いでハンガーに掛けた。そしてその上にシャツを着た。
四神学園の制服は白と赤で、カスタマイズ自由である。
僕の制服は、前を空けたまま、コートのように羽織れるように改造している。

「えーっと、後は・・・今日は戦闘実技もあるのか・・・・。じゃあ、銃の整備もしとかないと・・・・・」

戦闘実技、とは四神学園の特別授業に含まれる科目で、能力者は能力の研磨。無能力者は銃火器の使用訓練だ。
僕は無能力者に含まれるので、銃火器の使用訓練である。

僕が好んで使うのは、コルトＭ１９１１―通称コルト・ガバメントだ。
一応、威力的に足りない場合もあるので、改造はしてあるが。

あと、もう１丁持っていて、そっちはアサルトライフルであるＭ４Ａ１とＭ２０３Ａ１グレネードランチャーのセットである。
まあ、専用のバックに入れてるが。

カチャカチャ・・・・・

フレームを解体してオーバーホールを済ます。

そして、また組み上げたそれを、コート状になっている制服に掛けた。

アサルトライフルのほうはもう先日に済ませてある。

時刻は６：２７・・・丁度いい時間なので朝食を作ることにした。

メニューはトーストと目玉焼きにベーコン焼きのシンプル且つオーソドックスなものだ。

ジューーッ

こういう料理は一人暮らしをすることになってやっている内に覚えた。

まあ、趣味としてやっていたのである程度は出来ていたのだが。

それから数分後、出来上がった料理をテーブルに乗せて、席に座った。

「いただきます」

挨拶をして食べ始める。

・・・うん、今日もいい出来だ。

ゆっくりとご飯を食べて、時計を見るともう７：００である。

「さて、今日も頑張るか」

そう一言だけ呟いて僕は部屋を出た。

「じゃあ、行ってきます」

ガチャ・・・バタン。

これが、僕の朝の様子である。

第二話

僕は、寮を出て、そのまま学校へ向かう。
四神学園は、全寮制なので登校が楽で助かる。
まあ、その分在校中は大変なのだけれども。

うちの学校は、特別な制度があって、それの一つが一年に一度、自分の守護獣を決めるということなんだけど・・・・・。

「青龍、朱雀、白虎、玄武。どれにしようかなあ・・・・・」

青龍、朱雀、白虎、玄武は有名な四神である。
この学園にはそれぞれその４体のうち、生徒は１体と契約を結ばなければならない。

契約を結ぶと、さまざまな御加護があり、そのおかげで無能力者でも戦えるんだけど・・・。

「どれを選ぶかによって加護も変わるからな～」

しかも、一度契約すると、最低でも一年は守護獣を変えられないのである。

「一撃(セイリュウ)の攻撃力か技術(スザク)やテクニックか、それとも絶対的(ビャッコ)な速さか究極(ゲンブ)の守りか・・・・・」

さっきも言ったとおり、それぞれによって加護の中身も変わる。
大体は同じようなものなのだが、どれを選ぶかによって固体特有の能力が変わるのだ。

青龍は一撃の攻撃力、朱雀は戦術の幅を広げるための技術とかがいい例だ。
2年生からが対称なので、今年は僕も選ばなければならない。

「はあ・・・・・」

本当にどうしよっかな・・・・「れ～いかっ！」

「うわ！？・・・なんだ劉邦か」
「なんだってなんだよ・・・」
「ふふふ・・・なんでもない・・・。おはよう、劉邦」
「？おはよう、零禍」

目の前にいるツンツンの髪の、（顔だけ）人を寄せ付けないようなこいつは双旋地　劉邦。
僕の（一応）友達だ。

「それよりもさー。守護獣決めたか？」
「いや、まだだけど・・・劉邦は？」
「ばっちし、やっぱり青龍だろ！」
「ふーん」

どうやら劉邦は青龍らしい。
なんというか・・・劉邦らしいので納得がいった。

「それよりも、はやくクラス発表見に行こうぜ！どうせ零禍もまだだろ？」
「うん・・・そうだけど」
「じゃ、決まり！さっさと行こうか・・・じゃあ、競争だぜ。ヨーイ――――ドン！」

「あ、ちょ・・・ずるいじゃないか、先に行くなんて・・・待てよ！」

僕は、先に走っていった劉邦を追いかけて、走った。

第三話

ったく・・・速いっての・・・・・。
いつも劉邦は周りが見えてないんだから・・・・・。
僕は先に行ってしまった劉邦を追い掛けて走っていた。
正直なところ、速さには自信があったのだが・・・。
「やっぱ、劉邦には勝てないや・・・・・」
ただ、このままだと置いて行かれてしまうな・・・。
「はあ・・・・」
頭の痛くなる話だが、結局こうなるのね・・・・・。
「ふわあ・・・・・」
春の気持ちのいい温度で、ついつい欠伸が出てしまう。
だが、しかたないだろう。
考え事をしながら歩いていたとき、不意に誰かとぶつかった。
ドン！
「きゃ！」
「うぉっと！」
刹那。

僕は彼女が倒れないようにその手をつかんだ。
よかった・・・・・。ビックリしてはいるけど怪我はないみたいだ・・・。

「ゴ、ゴメン！前見てなかったから」
「い、いえ！私も気づいていませんでしたし・・・」

目の前の子は、正直言って可愛かった。
って、見惚れてる場合じゃないな・・・！
ぶつかってしまった彼女に侘びを入れて、今度こそしっかりと立たせた。

「大丈夫だった？」
「え？うん」

ヤバイ、早くしないとクラス発表を見られないだけじゃなくて本格的に劉邦に置いて行かれるぞ。

「ゴメン！これから用事があるんだ！それじゃ！」

僕はそう言って走る。
目指すは学校の玄関である。

「・・・・・あ」

後ろで何か言っていた気もしなくはないが、それよりもだ。
とりあえず今は置いて行かれないように急ぐことが先決だな。

◆

「遅いぞ零禍」
「いや、お前が速いだけじゃないか」
「・・・そうか？」

いや、多分・・・絶対そうだと思う。

「まあ、いいや・・・。クラスクラス・・・っと」

そういって僕の名前を探す。
この学校は総合的な能力でクラスが変わる。A、B、C・・・といったようにね。
それにはもちろん能力の有無も関係するのだが・・・・・。

「お！やったぜ、俺はCクラスだ！」
「ふーん・・・・・」

聞き流しながら僕の名前も探す・・・と探すまでもなかった。

「僕もCか」
「お！今年も同じクラスか。よろしくな！」
「うん、よろしく」

まあ、中間だからいいか。
一番上がA、二番目がB、中間がC、下から二番目がD、一番下がEだ。
Aに入れるのは能力者だけなので、無能力者の僕たちからすれば高いほうではあるのだろうが、だ。

「うし、じゃあ新しいクラスに行こうぜ」
「うん、そうするか」
とりあえずは、新しいクラスに向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1613z/

龍の煌き

2011年12月9日01時01分発行